

試聴会・訪問記掲載

オーディオテクニカ AT-ART1000 試聴体験会報告

[オーディオテクニカ AT-ART1000 試聴体験会](#)にアナログフアンのM氏と行ってきましたのでその報告です。

開催日時：2月18日 13:00～14:30

開催場所：ハートンホテル心齋橋別館 3F「桜」の間

プログラム：

山之内氏セレクト各種レコードソフトによる試聴

山之内氏とオーディオテクニカ同製品開発担当者による製品解説

[AT-ART1000](#) はオーディオ各誌の賞を受賞しており、一度聴いてみたかったので応募しました。本製品は発電コイルをスタイラスチップの真上に配置する、独自のダイレクトパワー方式を採用した MC カートリッジで、発電コイルをカンチレバーの根元に配置する従来方式と比べ、カンチレバーの長さや材質に起因する音質への影響を抑制でき、音の細部まで生々しく描写し、高忠実度再生を実現したということです。



<使用機器>

プレイヤー：トーレンス TD550

アーム：SME 309

フォノイコライザー：アキュフェーズ C37

プリアンプ：アキュフェーズ C3850

メインアンプ：アキュフェーズ A 70

スピーカー：ソナースファベール オリंपিকাⅢ



<試聴の経過>

プログラムに沿ってオーディオ評論家の山之内氏選定の各種レコードソフトによる試聴と山之内氏およびメーカー製品開発担当者による解説が行われました。

メーカー担当者はアナログのソフト、ハードの動向およびカットコアモデルを使っ
ての ART-1000 の詳細説明があり、山之内氏による製品の音質の特長の説明を交えな
がら録音年代別にレコードソフトによる試聴があり、最後に質疑応答が行われました。
最初にかけてられたのは、ジュリーニ／フィルハーモニアのロッシーニのオペラ序曲で
したが、一聴して S/N 感、ダイナミックレンジ、低音のクリアーさが分かりました。
但し、リマスター盤だったので、オリジナル盤での音質がどうであったか知りたいと
いう思いが残りました。

次はブルーノートのジャズでしたが、クリアーな音像と録音の考え方が分かるような
再生でした。

さらにケルテス／ウイーンフィルの新世界がかかりましたが、残念なことに
ESOTERIC のリマスター盤でしたので、カートリッジが優秀である分、自宅でも聴
いている ESOTERIC のリマスターのセンスの悪い面がかえって目立ちました。

録音年代が下って、ローリングストーンとチャイコフスキーの 4 番の TELARC 盤が
かかりましたが、音のクリアーさやハイスピード感、立体感がよく出ていました。

さらに録音年代が下って、オペラのデュエットになるとデジタル録音であることが
分かるような再生でした。

最後に今話題のベルリンフィルのブラームス 1 番のダイレクトカッティング盤がか
かりましたが、フレッシュな印象の反面、ミキシングでの劣化をさけるための 2 本
のマイクセッティングでの、音響効果の優秀なワインヤードの大ホールの全容を捉え
るには、日常的にベルリンフィルのデジタルコンサートホールを鑑賞しているだけ
に少し物足りない印象でした。

まとめとして、ベルリンフィルのダイレクトカッティング盤が聴けたのはありがたか
ったですが、録音年代の古いものではリマスター盤ではなく、オリジナル盤が聴けれ
ば、本製品のもつハイスピードで S/N の良いというポテンシャルをもっと正確に把
握できたでしょうし、可能であればオリジナル盤でのフォノイコのインピーダンスマ
ッチングやイコライザーカーブの最適化を行えば、さらに意義ある試聴会になったと

思います。